

発行日 平成 30 年 1 月 15 日(月)  
発行者 (福)盛岡市社会福祉事業団  
本宮児童・老人福祉・活動センター  
住所 盛岡市本宮四丁目 38-26  
電話 635-4595. 636-3546

各班での回覧を  
お願いします。

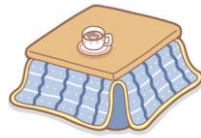
～藤村未来さん(本宮地区在住)からセンターだよりに掲載する原稿を書きいただきました～

## 本宮児童センターの思い出

### ～一輪車とともに！～

冬季オリンピックの気配が近付き、寒さも一段と厳しくなってきました。こたつが愛おしい季節でもあり、ぬくぬく温まりながら、昔のことを少し思い出してみます。

自分のことで恐縮ですが、小学生のころから私は母方の祖父母と同居しており、両親祖父母共働きでしたので、学校の帰りは毎日児童センターに通っていました。

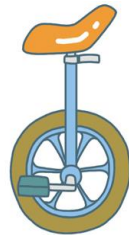


友だちの中には鍵を持って学校に行き、一度自宅に帰りランドセルを置いて一息ついてから児童センターに行く子や、そのままお家でお留守番するいわゆる鍵っ子もいましたが、当時の私は残念ながら両親の信頼を得られず、鍵を持たせてもらえなかったため、毎日学校が終わると直接児童センターまで歩いていました。(ちなみにとうの昔に社会人になった現在もまだ信頼の回復は見込めず、いまだに家の鍵がどのようなものかもわからない私です)

児童センターでの思い出は、バス旅行、スキー・スケート教室、文化祭などの大きな行事のことはもちろん、活動クラブを含めた毎日の何気ない生活も楽しかった思い出として記憶に残っています。

私は活動クラブの中でも一輪車クラブがとても大好きでした。

当時、児童センターの厚生員さんが模造紙に書いて作成した「一輪車検定」が遊戯室の壁に掲示されていました。たとえば「20級…補助台や大人に支えられて乗る」・・・「1級…バック(後ろ向き)で進む」・・・「5段…その場でスピン」等。



定期的に検定試験があり、自分の好きな階級を選んでチャレンジすることができます。

自由参加でしたが、検定に合格すると、厚生員さん手作りのメダルがもらえました。

運動も勉強も友達を作ることも苦手な私が唯一、同学年の子よりもクリアできる課題が多かった一輪車クラブ。

運動能力が壊滅的な私が一輪車だけは人並み程度にできたのは、当時の厚生員さんの接し方が大きく影響していると思います。



《当時の藤村さんがいただいたメダル》

学校の体育では「これができればこれもできるはず」「頑張ればできる」と、常に目標を提示され、出来ないのは努力が足りないからだと言われ、情熱的な指導を受けることに比べ、児童センターでは「前よりも、これができるようになったね、すごいね」と本人が今できた結果についてほめていた

だったため、自信が湧き、「次はこれにしよう」「これはここまでにして、次はこれをやろう」と、自分で目標とやめ時を決めて活動に参加できたことが良かったのだと思います

人見知り…の分別に入るかどうかわかりませんが、私は全くの初対面の方や今後深く関わることがないであろう人とは物怖じせず話することができるのですが、学校の友達や先生など、今後も長く付き合う「近いコミュニティの人だけどもまだそんなに親しくない人」と話すのがとても苦手でした。

それを乗り越えて親しくなれば全く平気で、普通に話せるのですが…この若干やっかいな性格。本人の努力不足だと学校で言われ続け「人には得手不得手があるのになあ」と投げやりになっていた私。

そんなちょこっとクセのある私は、厚生員さん方にたいそうご迷惑をおかけしたことと思います。が、厚生員さんや館長先生に優しく丁寧に接していただいたおかげで、私は学校や家庭とも違う第3の居場所であった児童センターでの生活を居心地良く過ごすことができました。



老人福祉センターが併設されていたこともあり、いろいろな年代の大人の方と話をすることがあったことも楽しかった思い出の一つです。

子どもとは「自分を見てほしい」という気持ちを持っている子が多いと思いますが、私は「自分だけを見てほしい」とは思わず「自分も見てほしい」という気持ちでいました。

その場の一員として認めて欲しかったのです。

学校のような大きな集団にいと、気にかけていただいていることをなかなか実感できずにいましたが、児童センターでは、自分を見てくれている人がいると感ずることができ、安心感を持って毎日過ごすことができました。

ひとの気持ちは誰にもわかりませんが、言葉や行動がその人の全てではないと思います。人の言葉や行動だけを見て、「この人は…」と判断するのではなく、障害の有無や周りの印象に左右されず、一人ひとりと向き合う姿勢を持つ、福祉の心を持つ方と出会えたことによって、私はいま生きているのだと思います。

そんなとってもお世話になった事業団に今また職員としてお世話になっていることは感慨深いものがあります。

今までいろいろな人に助けていただいて、現在も諸先輩方の手を借りながら毎日過ごしていますが、いつかは人を支える側に立ち、人の思いを汲み取れる人になろうと、寒空を見、こたつでアイスを食べながら思うのでした。



(藤村未来さんは、現在、盛岡市社会福祉事業団の職員でおられます。盛岡市社会福祉事業団は盛岡市から指定を受けて児童センター・老人福祉センター・活動センターを管理・運営をしている団体です。)

藤村未来さんは本宮児童センターに通った方で、現在も本宮地区に住んでいるということで原稿を書きいただきました。

センターでは「センターとして一人のためにどれだけ尽くせるか！」が大切だと思っております。藤村さんの文章からセンター職員として学ぶべき示唆を示していただいたと感謝しております。・・・センター職員一同